

# 青森方言の敬語法

此 島 正 年

## 序

敬語法は、周知のように、表現の向けられる聞き手、読み手すなわち対者に対するものと、表現の中に素材として出て来る者に対するばあいとに、二分される。そうしてこの二者は、等しく敬語法と稱せられるものの、時枝博士が指摘せられたように、本質的といつてもよいほど相異なっている。今この兩者の關係を中央語に於て見ると、素材敬語の發達の方が古かつたようで、対者敬語は中世以後の發達にかかるようである。普通には平安朝の「侍り」がすでに対者敬語であるようにいわれるが、松下博士が明言しておられるように、素材敬語の主語尊敬と普通共存しないところを見ると（例えば「仰せ侍り」とはいえない）、やはり素材に左右されるものである。ところが中世に入つて「候ふ」が用いられるようになると、ほぼ現代の「ございます」「ます」「です」等の出現にいたつて、はじめて完全な対者尊いいかたも可能になる）、近世以後の「ございます」「ます」「です」等の出現にいたつて、はじめて完全な対者尊敬法を見うるようになったのである。

しかし方言の方を見ると、少くとも東部方言ではこの關係はむしろ逆で、一般に素材敬語の發達はきわめて程度低

く、その敬語法の大部分は対者に対するものといつてよい——例えば中央語で「先生いらつしやいますか」というばあい津軽方言では「センセ、イシタカ」でまにあう。従つて地方人の標準語使用のばあいに、素材敬語は二の次になり、「先生いますか」で敬語を使つたつもりでいることが少くないのである。そこで本稿に於ても、以下述べるところはおのずから青森方言の対者尊敬を主とし、補足的に素材敬語を紹介する程度にならう。

一

共通語の対者敬法では、動詞につく「ます」と、体言およびそれに準ずる語や最近は形容詞にもつく「です」が、その中心をなしているが、青森方言では、前者に相当する語に、津軽の「ス」および一部の「ヤンス（八戸地方）」があり、後者には、共通語のそれに似た「デス」がある。

エギス エギヤンス（行きます）

エギヘン エギヤンセン（行きません）

エギシタ エギヤンシタ（行きました）

ソンデス（そうです）

ソンデヘン（そうでありません）

ソンデシタ（そうでした）

活用は御覽のとおり不完全ながらサ変である。デスの変形に、デゴス・デゴエス・デゴアス・ズゴアンス等があり、主として老年層に用いられる。なお、形容詞にはデスはつかずゴス・ゴエス等がつく。

サビゴス（寒いです）

エゴス（うすです）

スンズシゴス（涼しいです）

形容詞の終止連体形につくのである。

ところが方言ではこのほかに、終助詞による対者尊敬法がある。例えば

ズンブ フタネシ。（ずいぶん降りましたね）

ソンドネシ。（そうですね）

のように、ス・デスを用いなくても、ネシのような終助詞の添加によつて、対者へ敬意を向けることができる。従つてス・デスは、共通語の「ます」「です」に比して、使用度がそれだけ低くなるわけである。

右に挙げたネシは大体津軽地方の語で、南部方面では北の方がニシ、南はネアシ・ナシ・ナンシ等かなり複雑な分布を示している。これらのネシ群は、方言としては最上級の敬意のあるもので、都会地に多く用いられる。農漁村の狭い同族的社会では、このようないわばよそゆきの語を用いる必要はあまりなく、右の例でいえば、ズンブ フタネ・ソンドナで普通用が足りるのである。なお津軽のネシについて一言付け加えると、弘前市ではこれがネサ・ネハ等に変形して、女性的なやさしい表現として多く用いられる。「津軽の標準語」として、弘前以外の人でこれをまねる者も少くないのである。

ネシ群は本来は対者の同意を求める氣持の助詞で、東京語のネに当るが、東京のネには必ずしも敬意が感じられない（もつともナよりはていねい）のに対して、これは前述のようにほとんど尊敬の終助詞といつてよいくらいである。ところが、津軽のもう一つこれと似たノになると、逆に同意を求める意味の方が強く、軽い敬意——というよりもむしろ親愛の氣持が、それに副次的に添い加わるといつた程度になる。このノはもとほ青森市の女性が主として用

いたものだといわれるが、近頃は弘前をはじめ津軽一帯にかなり廣く用いられるようになり、男でもやさしいものに使うことが少くない。弘前市でもこれが若い女性の間に勢力を得て來て、ネハに誇を持つ古老を歎かしめる有様になつて來ている。南部にはエを添加して軽く敬愛の意をあらわす方法がある。

アメ フテ キタエ。(雨が降つて來ましたよ)

コレ ミダカエ。(これ見ましたか)

以上のように方言では、助動詞によらずに、終助詞の用い方によつて敬意を示すことができることが多いが、そのおもしろい例をもう一つ挙げると、疑問の終助詞ナとカとの使い分けである。

(1) コレ ナノ カサナ。

(2) コレ オメノ カサカ。

(3) コレ ミダナ。

(4) コレ ミダカ。

(1)と(2)、(3)と(4)はそれぞれ同一内容の問いであるが、ナの用いられる(1)(3)に対して、カの用いられる(2)(4)は敬意を持ち、共通語の「これあなたの傘ですか」「これ見ましたか」に近いのである。在の人にとこのような問い方をされて、他地方人が不快を感じるのは、この問いの中にある敬意に氣づかないからである。

## 二

以上、方言の敬語法の中心をなす対者尊敬の語法について述べたのであるが、しかし素材敬語ももちろんないわけではない。ただし、それは素材敬語とはいえ、純粹に第三者に対するものは至つて少く、対者が素材となつてそれに

対するばあいが大部分で、従つて間接には対者に対する敬語といつてもよいわけである。これに該当するものとして対稱代名詞および動詞の命令法が考えられるので、次にこれについて述べよう。

対稱代名詞の用法は、なかなか複雑である。都会地では、現在は共通語的なアンダが敬意を以て用いられるようになり、本来敬語であつたオメ（お前）は、もう対等以下に下落しているが、在ではまだオメがかなり敬意を残している。これに対して、全く敬意のない語にナ、ガがある。（南部地方ではガのかわりにイガの用いられる所もある）。これはもう都会地では悪いことばとして避けられるようになってゐるが、在ではまだまだ普通に用いられ、やや敬意あるオメに対して、親しい関係に行われる。因にナとガとを比べると、後者の方がいつそう粗野で、罵りあうようなばあいに多く使うと調査に答えてくれた所もある。なお複数形について一言すると、共通語的なアンダはアンダガダアンダダジがあつて、前者に敬意高く、オメにはオメダジとオメンドとあつて、やはり前者に敬意が高い。ドは方言特有の複数接尾辞で、ワンド、オランド（以上自稱）、ナンド、ガンド等に廣く用いられる。因に自稱のワとオラ（オレは青森方言ではほとんどあらわれない）では、後者にあらたまつたていねいな感じがあり、都会地の若い女性でも、日常の会話ではこれを用いるのが普通である（もつとも最近では共通語的なワダシが大分勢力を得て來てはいるが）。

次に動詞の命令法にあらわれる敬語法について述べよう。もし素材敬語が十分に発達していれば、第三者を主語として、例えば「先生がいらつしやらない」「いらつしやつた」「いらつしやれば」のように、動詞の各活用形が備わるわけであるが、方言では命令法以外はほとんどないといつてよい。前述のとおり命令法は対者を主語とし、すなわち間接に対者尊敬になるからである。もつとも第三者尊敬が全然ないわけではなく、南部地方の南半では、なお中年以上の人々の間に

センセ| オンデアタ。(先生がいらつしやつた)

のような語法が、かなり見出される。オンデアル、ゴロウジアル、オハエリアル、オヤスミアルというような、室町期を思わせる語形である。南部に比べると、津軽にはこの種の表現は全く見られない。

さて、青森方言の命令法はなかなか複雑で、同じ縣でも津軽と南部では非常な差があり、特に南部は複雑である。津軽では

ヨミヘ(読みなさい) オギヘ(起きなさい) タデヘ(立てなさい) ミヘ(見なさい) キヘ、コイヘ(來なさい) のように「連用形+ヘ」(「來る」では「命令形+ヘ」も並行する)の形が、最も普通に用いられる。もう一つ

ヨミシナカ、オギシナカ、ミシナカ

の形があり、前者に比していつそう婉曲女性的な表現であるが、これはヨマナカ、ミナカという命令形の尊敬法で、本來対者の意向を問うものであつたかと思われる。南部地方は南北によつて相異著しく、北の下北方面では

ヨマサイン、オギサイン、タデサイン、ミサイン、カサイン(來なさい)

のように「連用形+サイン」(ただし「來る」はカに)の形が、中位の尊敬命令法として男女共に普通に用いられるこれに更に敬意を加えると

ヨマサマエ、ミサマエ、カサマエ

という形になり、これは最高の尊敬命令法として、多く女性が用いる。なお注意すべきは、以上のような上位、中位の敬語法に対して、下位ともいうべき軽い敬意の命令法のあることであつて、すなわち

ヨマセ、ミセ、カセ(もしくはキセ)

という表現法であり、かくて下北方面は、動詞命令法に関しては、上中下三通りの語法をそなえているのである。

ヨマセ、キセの語形は、下北から南下して上北郡にも行われる。更に南の三戸郡へ下ると、

ヨミテ、ミテ、キテ

のように「連用形＋テ」が普通であるが、八戸、五戸、三戸のような城下町の老人にはなお

オヨミアンセ、ゴロウジアンセ、オンデアンセ（もしくはオンデアレ）

等の古形が残っている。

## 結

以上を要約すると、青森方言の敬語法は素材敬語の発達が不十分で、ほとんど挙げるべきもなく、これに対して対者敬語は一通りそなわっているが、しかしこれも、終助詞による表現に勢力のあることが端的に示すとおり、中央語のような純粹の尊敬法ではなくて、多分に親愛の氣持の加わつたものである。これは方言發達の基盤が同族的な地方社会であることの、当然の帰結であつて、複雑な階層の分化によつて煩わしいまでに發達した中央の言語とは、一からげに論じられないのである。なお、今までの記述でもお分りのとおり同じく青森縣とはいいながら、津輕地方と南部地方とは、敬語法に於ても著しい相異を示していることは注意を要する。

（附記）本稿は昭和二十九年一月弘前大学人文社会学会研究発表会で述べたことをまとめたものである。なおこれに用いた資料には、国立国語研究所の委託で調査した事項も少くない。